

医学部、看護学部における ESP 教育の一考察

ESP for Students Majoring in Medicine and the Science of Nursing

神戸市看護大学 川越栄子

1. はじめに

超高齢化をむかえる日本において医師、看護婦に対する期待は益々高まって来るが、将来医療現場を担う医学部学生と看護学部学生に対してどのような英語教育を大学においてなされるべきかという議論は殆どなされていないのが現状である。医療現場が期待する人材はどのようなものなのか、大学の医学部、看護学部がどのような教育のもとにどのような人材を育てようとしているのかという議論をつくした後でないと **EGP (English for General Purposes)**、**ESP (English for Specific Purposes)**をどのように取り入れるかを本当に決定するのは困難であると考えられる。

しかし一方、大学設置基準の大綱化が文部省に発表されて以来、大学の英語教育は **EGP** から **ESP** へと移行しつつある。このような時期に医療職者を育てる医学部、看護学部の英語教育においてもこの流れに従う必要がある事は否定出来ない。そこで先ず、両学部学生に1年生の段階でどのような形で **ESP** を取り入れればいいのか今後様々な工夫を重ねて行く必要があると考えられるが、今回は昨年度授業で実際試みた方法を報告する。

その結果、学生はどのように授業を評価したのか、**ESP** を取り入れる時期、**EGP** との関わりについてはどのように考えればいいのか、更に医学部と看護学部においてなされる英語教育で、どの点は同じでどの点は違えなければならないか、どのような教材開発が必要なのかなどについて考察する。

2. 担当クラス

実践校：(1) 大阪市立大学医学部 1年 40名
 (2) 神戸市看護大学看護学部 1年 97名 (うち編入生12名を含む)
 授業名：(1) 英語 1 A (2) 英語 II

授業期間：1999年前期(4月－7月)

3. 授業方法

実践校(1)(2)両校とも授業の第一回目に実力テスト(一般用語・医学(療)用語の語彙力、及び読解力を試すもの)を行いその後それぞれ下記のような授業を行った。そして、最後に筆記試験を行った。

実践校(1)

1. テキスト A (医療、看護、健康をテーマにしたもの) — 殆ど日本語に訳す事はなく、テキストの文章の内容について英語で質問し、それに答えさせた。その後テキストの問題(内容に関する問題、医療英語の語彙を増やすための問題)をさせた。
2. 英字新聞、雑誌の講読、英語ニュースの聴解 — 日本で初めて臓器移植が行われた時期であったので、その関連の英字新聞の記事、及び英語ニュースを読ませ聴かせた。その中には当日のものも含まれる。更に英文雑誌に掲載された生命工学に関する記事も読ませた。
3. 映画の聴解 — 授業の最後の2回を使って映画 **Awakenings** (アメリカで実際に流行した嗜眠性脳炎と戦う患者、医師、看護婦のドラマ)を見せた。医療に関する用語を説明し、医師、看護婦の姿勢についてディスカッションをさせた。

11月4日(土) 実践報告 第6室 (202)

実践校 (2)

1. テキスト **A** (実践校 (1) と同一のもの) - 英文の難しい部分については日本語に訳させた。その後実践校 (1) と同様にテキストの問題をさせた。
2. テキスト **B** (病院における会話をまとめたもの) - 会話文の聴解、暗記をさせ、練習問題をさせた。
3. 海外の学生との **E-mail** の交換 - 海外の学生 (一部看護学生) との **E-mail** 交換をさせそれについてレポートを書かせた。
4. 映画の聴解 - 授業の最後の2回を使って実践校 (1) と同様に映画 **Awakenings** を見せた。医療に関する用語を説明し、医師、看護婦の姿勢についてディスカッションをさせた。

4. 実践結果

実践校 (1) (2) 両校の学生に授業評価をさせた。授業の進度、集中度、意欲度、理解度、有意義度、有意義の内容、不明時の処置、予習度、テキストの興味度等についてアンケートを行った。その結果、両校とも概ね評価が高かった。

5. 考察

1. 授業第一回目に両校で行った実力テストの結果と最終テストの結果を比較すると次のようである。最初の実力テストにおいて実践校 (2) の編入生は医学 (療) 単語の力については実践校 (1)、実践校 (2) の新1年生と比べて非常に高かった。これに対し最終テストでは実践校 (2) の編入生は実践校 (1) より低くなったが、実践校 (2) 新1年生と比べると高いままであった。

この結果から医学部の学生は看護学部の学生 (編入生、新1年生) に比べて習熟度が高い事、又看護学部の編入生の方が新1年生に比べて習熟度が高い事が判明した。この編入生の習熟度の高さは、現場で積んだ経験が背景にあるからなのか、熱心度が高いのかこの結果だけではわからないが、この点が明らかになれば、医学部、看護学部における **ESP** を行う時期、方法を決定する大きな根拠になると考えられるので今後、調査を行いたい点である。

2. 学生アンケートの中に医学 (療) 関連以外の題材も取り上げて欲しかったと言う声が少数であったが見られた。これは **EGP** も取り入れる必要があるという根拠となる。この **ESP** と **EGP** の兼ね合いについては最初に述べたように医療現場、医学部、看護学部の専門分野の教員の意識も調査して行く必要があると考えられる。

3. 医学部学生、看護学部学生ともに1年生の段階では今回のように教材のうち部分的には同一のもので良いと考えられる。しかし英語力、習熟度の違いにより同一教材の場合進度はかなり違って来るし、満足度を高めるには医学部には、最新の新聞、雑誌、インターネットの情報などを取り入れるのが有効であると考えられる。又、今回取り入れた映画については両校とも高い評価が得られ、将来医療職につく自分の生き方を考える一つの機会にもなって成功であったと思われる。

4. 現在、医療系大学生の為に日本で用意されているテキストの数は非常に数が少ない。今後医療職者の数と種類が急速に増える事が予想される為、全ての医療職を目指す学生に共通のテキストと、職種 (医師、看護婦、ケースワーカー、技師等) による個別のテキストの開発が必要であると考えられる。